



新型コロナウイルスの影響下において、本校が4月早々に双方向を含むオンライン授業を導入していることは、これまでのレポートでもご紹介させていただきましたが、「そもそもオンライン授業とは何か？」ということを考えてとき、オフライン(対面式)でできないことに挑戦してこそ、はじめてオンラインの真価が見えてくるのではないかと考え、標題の企画を5月11日(月)に慶應義塾大学 SFC(湘南藤沢キャンパス)の有名研究会である、長谷部葉子研究会と英数学館が共同で企画し、双方向コミュニケーションツールの ZOOM を用いて実行致しました。本企画は今回紹介する初回を含め、5月中に3回実施される予定で、回が進むごとに議論のテーマも難しくなります。

「EISU ラボ」発足！新しい学びは学校の外的世界へと広がる

今年度より、通常授業の他、大学や一般企業、NPO、官公庁など、学校の外の方々と手を携えながら、「正解のない問い」に対し、粘り強くその解決法をさぐる、いわゆる「探究型」の新しい学びに、生徒有志が挑戦し始めています。

その中心となるのが「EISU ラボ」。新型コロナウイルスの影響で、今は学校に来ることができませんが、今の時代は、国内はもとより、世界中の人たちと繋がることのできる便利な道具があります。そうです。パソコンやスマートフォンなどのデバイスとインターネットさえあれば、「オンラインでの探究」の学びの実践は可能です。今回の企画にも EISU ラボから生徒が参加しています。

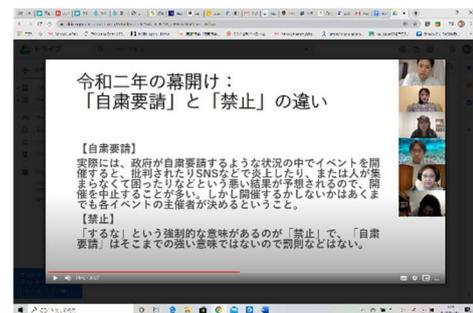


慶應 SFC の母が全国の高校生と大学生へ本気で問いかける3DAYs

今、各々が考える「自粛」の解釈とは？ 議論の熱気はオンラインでも健在！

今回は、今だからこそ思考すべきテーマのひとつとして、「自粛」に関する各々の解釈を全国から参加した11校、22名の高校生と長谷部葉子研究会の慶應 SFC 生8名が高校生のメンターおよび議論の進行を管理するファシリテーターとして参加しました。英数学館 EISU ラボから参加した2名の生徒も(高1女子・高2男子)、全体の前で積極的に意見を述べ、他地域からの参加高校生に負けず劣らず白熱した議論に身を投じていました。

本校がオンライン授業でも活用している ZOOM のブレイクアウト機能を用い、30名全員で議論する場と、7～8名で別れて議論する場を複数回切り替え、進むにつれて参加者の思考が自然と深まるように会の流れを、今回は慶應義塾長谷部葉子研究会と本校とで事前に綿密な話し合いの上、設定いたしました。



オンラインはオフラインの単なる代替手段なのか？

今回の企画は、全国的に広がるオンラインでの学びに対して、「健全な」批判的な見方も取り入れることで、オンライン教育の新たな可能性を模索する場であることを目指しました。折角オンラインで学ぶのですから、「オンラインでしかできないこと」を行いたい、そう考えたとき、①普段、なかなか直接会うことができない人同士が(物理的制約からの解放)、②日頃、異なる時間スケジュールで動いている人たちの予定を合わせ(時間的制約からの解放)、③高額の費用をかけずに(コスト面の制約から解放)、実施することこそが、「オンラインならではの特性」を活かした学びなのではないかと考え、実施いたしました。

英数学館は新型コロナウイルスの感染拡大が収束し、学校が通常登校に戻ったあとも、オンライン教育が子どもたちの一人ひとりの可能性を引き出し得るものとして、研究を継続して参ります。

